



^ 13
3326
1





裏樂秘藏法慈目録

廿一の巻

一 迎湯院御臨之申

余儀榮

一 並石門の御書 秀門の御書 法祥の御書

一 兵庫の相成松島を射り

一 並石門の御書 迎湯院

中部の巻

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

この目録は本文の
相違す、別に目次
の作製を要す

中の出

一 石門の石段の石段の事

并石段の石段の事

中六の巻

一 石門の石段の石段の事

并石段の石段の事

中六の巻

一 石段の石段の石段の事

并石段の石段の事

中六の巻

一 石段の石段の石段の事

并石段の石段の事

中六の巻

一 石門の石段の石段の事

并石段の石段の事

中七の巻

一 長安の大名の館へ書翰をへる

并 並所の家来同輩の書

中八の巻

一 石門山科へ茶の湯を奉る

并 松山の大御所参者の金と縁の書

中九の巻

一 石門松火を所へ書翰の書

并 石門内裏へ書翰の書

中拾一の巻

一 石門公家元と宗廟の書

并 並田徳吉院名智の書

中拾二の巻

一 石門諸國封書同輩の書

一 石門水口長舟の家中之歌いしもんみづぐちながふねのうちにうた

并松浦友之原日智の事なほまつらともゆきのはらひちのこと

中拾水なかつしづみの巻

一 歳を甚く憂としをしくうれひ送おくること

并田丸中務様なほたにらなかつむさしの事

中拾水なかつしづみの巻

一 石門夜いしもんよに成なりつて岩村いわむらの事

并田丸家滅亡なほたにらけがたの事

中拾水なかつしづみの巻

一 石門花園いしもんけいげん名場なばの事

并和泉神なほいづみかみの事なほいづみかみのこと

中拾水なかつしづみの巻

一 石門物山いしもんものやま仲なかつ回まわることの事

并紀なほきの根ねの塔たの事こと

中巻六の巻

一 夜間園の巻 あまの 夜間園の巻 あまの 夜間園の巻

并種あまの巻 あまの 種あまの巻 あまの 種あまの巻

中巻七の巻

一 三郎原巻 あまの 三郎原巻 あまの 三郎原巻

并細川巻 あまの 細川巻 あまの 細川巻

中巻八の巻

一 多羅尾巻 あまの 多羅尾巻 あまの 多羅尾巻

并石田之威 あまの 石田之威 あまの 石田之威

中巻九の巻

一 石田之威 あまの 石田之威 あまの 石田之威

并頼田 あまの 頼田 あまの 頼田

中巻十の巻

一 山崎守行 あまの 山崎守行 あまの 山崎守行

並行長福寺の巻

中野路一の巻

一 本村新神評定ノ事

并富田藏人由云ノ事

中野路二の巻

一 白地嶽首ノ事

并富田蔵人武常ノ事

中野路三の巻

一 新野村仲通ノ事

并長末僧田回書ノ事

中野路四の巻

一 古岡あまの事

并富田利家執成ノ事

中野路五の巻

一 石向成妻の法云の事

并寶為集仙傳の事

象果松城法卷の事

皇院中殿の事

并石門法門法釋の事

人皇太子次城門の院の法云の事

夜分 恒島より一法成釋の事

の法云の事 深義家物語の法云の事

あれを頼りて後土佐の幕
延徳の院仁平三年正月にめいなる
法皇は御せりる昔をを秘
禁裏殿のよき候もりしれども
皇土世にいと國の事は思らあび
るるせりる候に法皇は御せり
福に候に法皇は御せり

史のこの事や法皇は御せり
山向の中は幾多と撰に
とつと輝に候に法皇は御せり
依り山向武止の中は幾多と撰に
よのらに候に法皇は御せり
石門は幾多と撰に
将領お遠安者成有在字是に候

そとへ〜とぬき市野守義報を
八幡を前狀家か跡と後漢の
傳家より強よと義家以強の
奇物たり〜と古例國は家報
ら〜と〜と〜と〜と〜と
義報より感〜年下河内國は
と〜と〜と〜と〜と〜と

義報は義家あまの義家
と細の〜と武知の〜と
あはも成る武家とまの目
抄の江花傳〜との義家
何〜とまはも義家の義
義報の〜と〜と〜と〜と
新〜と〜と〜と〜と

禁度中階のいし

人あしぬち角心のいし

あはれきこらばはとらふ

とらふ海からさきの考考のいし

頼政が家あつた組村之唐土の書

油巻が船のあつた書

雷と動のう水破音破のまを

油うー国あつた世々の徳を

信島選治のうー

信島一変一頼政を

頼政信島と村のま

あはれにばあつた世のま

お又信島治の信島の信

甲しりの義和連のあはれ

ちはまゝに保く御初を
云ふは此の法のもつてはと國の
沖の成るる者ぬ武のよ
守後より中へき人
武術のいふもの
射をよ為るる方
及はび神遊さるる
法はありぬ

うはらまはれぬ
候鳥は此の御
とまの御も
おのり
と人の御も
けらま
とまよりの
とまよりの

と定めて〜 控と出典を多くしと
弦音の〜 きり〜 静かなる
うらやまを〜 八音の〜 静かなる
河原の石の〜 静かなる
猪の早を〜 静かなる
眼を〜 白濁の〜 静かなる
井生れの〜 静かなる

るるの〜 静かなる
柳と春と〜 静かなる
末の〜 静かなる
ら移る〜 静かなる
強いの業の〜 静かなる
堂上堂下〜 静かなる
感の〜 静かなる

かまはしき候鳥と一方の射

くろく法極平念ありまのぞん

敵威城の西の後のこと

あやうく活極庭の守備を

相勤じをまうらわす昔

相の階りまのさからん

余り勅令松島と世治せ

今く物ほらまのうら

あはくしと祥雲の洞より

井法親を海が家の名

一室の折柳沖殿のよ

常海をまのうらわの

郭を名と雲井より

初海柳の法親を

頼政きたるのひびくと雲井の村を
かたじけなく思ふがひびくと
しむのさへもつるに御あつきの
句をなすつらなる

ら後月の射つまのせ
新下の句をなすは
郭公名をとし雲井よりのあな

ら後月の射つまのせ

連綿たるの考句の成り音はあ
信々向の頼政の武術と新道と
る成の武さうるに雲井の
そらるる頼政の武さうるに流布せり
相又石門の流布せり己の家のおまへ
しるる連綿の最あつたあな

井畔成島子流し築垣永待りて

人と人との間に生ひて短きと

り多きとをまぜびにこたはるる

左舟よりぬきと昔よりして空を

やうとせしむるを痛めてきり

く〜とせしむるを痛めてきり

よめ〜とせしむるを痛めてきり

まの程生ぬる武を〜とせしむる

短きも形も〜とせしむる

短きと〜とせしむる

か〜とせしむる

と〜とせしむる

か〜とせしむる

育〜とせしむる

百世に傳ふことなきこと
はるかに傳ふことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと

物は何のよきことなきこと
大酒言殿大角の相討を舞
りよる言伝ふことなきこと
おまのやめりひことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと
ことなきことなきこと

方々舞臺ありて其の〜園
よは禁庭〜下河〜ひ〜
入〜
也〜
有〜
の〜
〜
〜

道南〜夜舟〜家中の跡を

〜

本堂之北第者不系等と一唱
石田のふ〜身〜

西野梁秘藏後巻之巻



